映画を使ったドイツ近現代史の講義 ——国際化と異文化理解における実践報告——

熊谷 哲哉

はじめに

本稿では、2014年度および2015年度に実践した、「国際化と異文化理解」における映画を使ったドイツ近現代史の講義実践について報告する。なお、講義の受講者は、経営学部の1年生および2年生で、2014年前期は約80名、2014年後期は約20名だった。2015年前期は約140名、後期は8名である¹。本稿では、まず講義の内容と進め方について概観し、次に2014年度の実践とその反省、さらに2015年度の講義実践と今後の展望についてまとめる。

1. 経営学部でどんな内容の講義をするべきなのか ——テーマの選択と講義の目的——

授業実践について言及する前に、この講義のテーマを選んだ背景について、簡単にまとめておきたい。本講義「国際化と異文化理解」は、主に第二外国語の教員（一部英語教員も担当）によって各学部で開講されている。経営学部、法学部などは一人の教員が半期15回を担当するが、文芸学部や経済学部では、数人の教員によるリレー講義となっている。筆者の本来の研究分野は、19世紀末から20世紀初頭のドイツにおける精神異常の表象をめぐる文学と思想である²。当然のことながら、このような研究は、多くの学生が関心を持っている経営やビジネスやマーケティングといった分野とは全く関係がない。大学における学問においては、もちろん専門分野について豊富な知識と深い洞察を得ることだけでなく、教養を深め、視野を広くすることも目標となる。それならば、教員が、学生にとって全く関係のない自分の専門分野について講義をしてしまっても構わないのかもしれない。とはいえ、教養あるいは学習の基礎となる科目として、一年生が多く受講するのであれば、なるべく学生たちの関心を引くようなテーマ、あるいは彼らの将来的な学習に役に立つような講義をするべきではないかと考えた。

近代以降のドイツの歴史は、多くの点で日本と似通っている。遅れてきた産業革命、その後の帝国主義的な野心、第二次世界大戦における敗北、荒廃した国土からの再出発と今日の経済大国化、ドイツが近代以後の200年で辿ってきた道は、そのまま日本の近現代とも重なっている。社会科学系の学問においては、現代の事象を扱うにせよ、歴史的な知識は不可欠である。ドイツの歴史と文化を学ぶと同時に、日本の歴史や現代の日本と比較す

ることで、自分たちが生きている現代世界をより深く理解することの助けになるのではないかと考え、本講義では、ドイツの近現代史を主題とすることにした。

近現代史を学ぶといっても、専門書や教科書を解説する、あるいは文学や芸術作品から歴史的なテーマを取り出すなど、様々な方法が考えられるが、本講義では、映画を題材とした。というのも、ドイツでは『Uボート』や『ヒトラー最期の12日間』のような第二次世界大戦をテーマとした作品をはじめ、歴史的な事件や特定の時代を描いた作品が数多く公開されているからだ。特にヒトラーとナチスドイツやユダヤ人の大量虐殺など、第二次世界大戦期を舞台とした作品は枚挙にいとまがないが、そこには当然、過去の歴史を反省しようという市民一人一人の姿勢があると考えられる。本講義では、ドイツ帝国が成立した1870年代から、東西ドイツが統一された1990年以降の現代まで、それぞれの時代を描いた作品を取り上げ、歴史的背景について解説するという方式をとることにした。

2. 2014年度の講義と反省点

2.1. 各回の内容

次に2014年の授業実践について説明する。前期、後期とも、各回のテーマおよび取り上げた作品と講義内容は下記の通りである。

回数	テーマ	上映作品	内容
1	ドイツの歴史と文化を学ぶ意味とは？	なし	講義内容、評価方法等の説明、学生の関心をアンケートで問う。
2	ドイツ文化とフットボール(1)	『コッホ先生と僕らの革命』 前編	ドイツ帝国成立(1871年)頃の社会と文化、
3	ドイツ帝国の成立とスポーツ	『コッホ先生と僕らの革命』 後編	英語教師コンラート・コッホとドイツフットボールの歴史
4	第一次世界大戦とドイツ	『戦場のアリア』 前編	第一次世界大戦はどのようにして起こったか
5	第一次世界大戦がドイツに与えた影響	『戦場のアリア』 後編	第一次世界大戦の終結と、戦争の与えたインパクト
6	ナチズムとスポーツ	『アイガー北壁』 前編	ナチズムとスポーツの関係
7	スポーツによる国威発揚とベルリンオリンピック	『アイガー北壁』 後編	ナチスは登山をどのように政治利用したか
8	ナチスドイツと抵抗運動	『白バラの祈り』 前編	ナチスドイツの政権掌握と抵抗運動

9	ナチスドイツの犯罪とドイツの敗戦	『白バラの祈り』 後編	ナチスドイツの戦争犯罪と敗戦
10	ドイツ文化とフットボール (2)	『ベルンの奇跡』 前編	大戦後のドイツ社会
11	戦後ドイツの復興とフットボール	『ベルンの奇跡』 後編	敗戦国ドイツの復興と W 杯
12	ベルリンの壁崩壊と現代ドイツ	『グッバイ、レーニン!』 前編	東西ドイツの成立とベルリンの壁
13	2000 年代におけるベルリンの壁	『グッバイ、レーニン!』 後編	東西ドイツ時代を懐かしむオスタルギー
14	ドイツの環境政策と脱原発	『みえない雲』 前編	ドイツの環境政策の特徴。
15	チェルノブイリ事故と現代ドイツの環境思想	『みえない雲』 後編	原発事故をドイツはどのように報じたか。講義全体のまとめ。

2.2. 課題と成績評価

本講義では、90分から120分ほどの長さの映画を七本選び、二回で一作品を見終わるようにスケジュールを組んだ。毎回45分から60分ほど映画を見せ、その前後にテーマに関する歴史的な事柄を解説した。各テーマの初回には、歴史的背景を概観し、映画全編を見終わった後には、説明が必要な事柄について資料を使って補った。例えば第2回には、映画上映前に、ドイツ帝国がどのようにして成立し、その時代にどのような社会の変化があったかを説明した。第3回では映画を見終わった後に、映画の主人公で、ギムナジウムの生徒たちにフットボールをもたらした実在の人物である、コンラート・コッホの業績を紹介するとともに、その後ドイツにどのようにフットボールが普及していったかを解説した。

学生には毎回出席カードを配布し、各回の感想、映画や講義の中で気になったことを記入させた。さらに、映画を一本見るごとに——すなわち二週ごとに——800字から1,000字程度の小レポートを、自宅学習の課題として提出させた。学期末には、授業の中で言及した歴史・文化的なできごとについて語群選択式の問題と、映画作品の内容を問う記述式の問題を、期末試験として行った。

2.3. 反省点

2014年の授業における反省点は、何より学生に漠然と映画を見させてしまったという点である。毎回出席カードを配布していたものの、感想や気になったことを書く、という漠然とした課題しか与えられていないため、「おもしろかった」、「難しかった」など一言程度のコメントしか書けない学生が多かった。二週間ごとのレポートにしても、論じる内容や論じ方を特に指示することがなかったため、あらすじをウィキペディア等で引き写した

ものが大半を占めることとなってしまった。もう少し受講者が主体的に頭を使うような課題を出す必要があった。また、二回の授業で映画を一本見せるという時間配分も、かなり余裕がなく、毎回解説として話せることはごくわずかで、映画を見せること自体が目的となってしまう面もあった。さらに前期は受講者が80名と多かった一方、後期は20人と大幅に人数が減ったにもかかわらず、同じ内容・同じ方法の講義になってしまったことも反省すべきことと言える。

3. 2015年度の講義内容と反省

3.1. 2014年の反省を受けて変更した点

2015年度の授業において、大きく変更したのは、講義全体のテーマ、とりわけ時代設定である。それまではドイツ帝国の成立から現代と、かなり幅広い時代を扱っていたが、学生たちのコメントを見ると、後半に扱った第二次世界大戦後の東西ドイツ分裂時代、そしてベルリンの壁崩壊といったテーマが関心を集めていたことがわかった。1990年代半ば以降に生まれた現在の大学1、2年生にとって、東西ドイツが分裂していた時代は、全く未知のものである。それゆえ東ドイツというもうなくなってしまった国家に関心を抱く学生が多かったのだろう。そこで、2015年には、第二次世界大戦後に的を絞り、特に東西ドイツ分裂時代を中心に、現代ドイツとその周辺の地域も含めて、さまざまな問題を取り上げることにした。時間配分についても、二週で一本の作品を見るということにこだわらず、三週にわたって上映するような長い作品も含め、全部で六本の映画を選んだ。学生たちへの授業時間外の課題についても、テーマごとの小レポートではなく、毎回、映画と講義内容についての設問に答える形式とし、中間レポートと期末レポートを課すことにした。

3.2. 2015年講義の内容³

回数	テーマ	上映作品	内容
1	ドイツの歴史と文化を学ぶ意味とは？	なし	講義内容、評価方法等の説明、学生の関心をアンケートで問う。
2	戦後ドイツの復興とフットボール（1）	『バルンの奇跡』 前編	第二次世界大戦の終結と戦後ドイツの復興。
3	戦後ドイツの復興とフットボール（2）	『バルンの奇跡』 後編	戦後ドイツの復興とW杯。東西ドイツの成立。
4	68年の西ドイツ（1）	『バーダー・マインホフ—理想の果てに—』 前編	1968年の世界的な学生運動の高まりとドイツ。

5	68年の西ドイツ（2）	『バーダー・マインホフ—理想の果てに—』 中編	学生運動の変質とテロリズム。
6	68年の西ドイツ（3）	『バーダー・マインホフ—理想の果てに—』 後編	学生運動とその後の市民運動。
7	西側から見たベルリンの壁（1）	『ベルリン天使の詩』 前編	都市ベルリンと東西分割時代。
8	西側から見たベルリンの壁（2）	『ベルリン天使の詩』 後編	ベルリンの歴史。
9	東ドイツ社会と公安警察（1）	『善き人のためのソナタ』 前編	東ドイツの社会。西側との違い。
10	東ドイツ社会と公安警察（2）	『善き人のためのソナタ』 後編	東ドイツ文化と検閲の問題。
11	現代ドイツと東ヨーロッパ（1）	『アンダーグラウンド』 前編	ドイツの歴史と東欧の民族問題。
12	現代ドイツと東ヨーロッパ（2）	『アンダーグラウンド』 後編	ユーゴ内戦と2000年代のヨーロッパの民族問題。
13	2000年代における東西ドイツの痕跡（1）	『グッバイ、レーニン！』 前編	ドイツの統一と社会の変化。
14	2000年代における東西ドイツの痕跡（2）	『グッバイ、レーニン！』 後編	現代に残る東ドイツへの思い。
15	全15回のまとめ	なし	これまでの講義内容をまとめる。

3.3. 2015年度の授業の反省

2015年度の授業では、前年度の反省を生かして毎回問題を出し、次の回の冒頭5分程度を使って、前回の振り返りとして学生からのコメントをいくつか選んで紹介した⁴。問題を出し、その振り返りをすることによって、前年度に比べて、真面目に作品を見ようとする学生が増え、授業に主体的に参加しようとする姿勢が見られるようになった。また、教員側にとっても、学生の回答から、作品や講義内容をどれだけ理解できているかがすぐに測れるようになった。15回の講義の中で、さまざまな作品を見ることによって、学生側の映画を見る視点が鍛えられ、映画の見方を体得して成長していく様子も何人かの学生において見る事ができた。

3.4. アンケートの実施とその結果

2015年の授業では、8回目に中間レポート、学期末に期末レポートを課し、最後にアンケートで学生たちがどのようにそれぞれの作品を見たのかを確認した⁵。アンケートの内

容は以下の通りである⁶。

アンケート (2015 年前期)

授業で扱った映画作品について、以下の質問に答えてください（出席票の裏面に記入しましょう）

1. ベルンの奇跡
2. バーダー・マインホフ—理想の果てに—
3. ベルリン天使の詩
4. 善き人のためのソナタ
5. アンダーグラウンド
6. グッバイ、レーニン！

以上の作品のなかで、

- 1) 最も面白かった作品はどれでしょうか。（一つ選ぶ）
- 2) 最もつまらなかった作品はどれでしょうか。（一つ選ぶ）
- 3) もう一度見たい作品はどれでしょうか。（複数回答可）
- 4) 難しいと思った作品はどれでしょうか。（複数回答可）
- 5) レポートで取り上げたい作品はどれでしょうか。（複数回答可）

番号で答えましょう。＊該当するものがなければ「なし」と記入しましょう。

アンケートの結果は、下記の表の通りである。（ ）内は得票数。

質問	1位の作品	2位の作品	3位の作品
1	ベルンの奇跡 (33)	善き人のためのソナタ (25)	グッバイ、レーニン！ (19)
2	ベルリン天使の詩 (52)	善き人のためのソナタ (17)	アンダーグラウンド (17)
3	ベルンの奇跡 (37)	アンダーグラウンド (35)	善き人のためのソナタ (32)
4	ベルリン天使の詩 (46)	バーダー・マインホフ (42)	アンダーグラウンド (30)
5	グッバイ、レーニン！ (53)	善き人のためのソナタ (46)	アンダーグラウンド (28)

後期のアンケート結果は下記の通りである。⁷

質問	1位の作品	2位の作品	3位の作品
1	おじいちゃんの里帰り (3)	善き人のためのソナタ (2)	ベルンの奇跡 (1)
2	善き人のためのソナタ (2)	アンダーグラウンド (1)	グッバイ、レーニン！ (1)
3	善き人のためのソナタ (3)	グッバイ、レーニン！ (3)	おじいちゃんの里帰り (3)
4	バーダー・マインホフ (3)	アンダーグラウンド (3)	善き人のためのソナタ (1)

前後期で行った上記のアンケートから、前期に「最も面白かった作品」で『ベルンの奇跡』——1954年のサッカーワールドカップスイス大会において、西ドイツチームが優勝、チームを支えた少年と傷ついた家族の再生が描かれる——が人気を集めたように、分かりやすい作品に人気が集まるという傾向が見られた。前期で三本目に見せた『ベルリン天使の詩』は、モノクロの美しい映像が特徴的な作品だが、その反面ストーリーが分かりにくく、セリフもかなり難解であり、多くの学生は途中で見ることを放棄し、眠ってしまった。アンケートでも「最もつまらなかった作品」として圧倒的多数の得票を得ている。そのため後期は授業内容から外して、現代ドイツのトルコ人家族を描いた『おじいちゃんの里帰り』を見せることにした。それでも前期のアンケートにおいて、『ベルリン天使の詩』は、「最も面白かった作品」で10票を得ている。さらに、多数の登場人物、複雑な人物関係や時代背景などから、やや分かりにくいと思われた『バーダー・マインホフ—理想の果てに—』を選ぶ学生も14名見られた。前期には期末レポートにて成績評価を行ったが、実際に提出されたレポートでは、約半数が『グッバイ、レーニン！』を選んで論じていた。

4. 授業の反省と今後の展望

本稿では、以上のように、2014年度および2015年度における「国際化と異文化理解」の授業実践について報告してきた。二年間の授業を終えて、いくつかの問題点が見えてきたのでまとめておきたい。

まず、大きな問題あるいは困難となっているのが、受講者数の問題である。日頃約30人程度の語学の授業ばかりを担当している筆者にとっては、140名という受講者数はあまりに多すぎる。そのためどうしても一方的に教員が話す授業になってしまいがちである。もう少し語学の授業のように、教員と学生とが対話できるような機会が得られないかと考

えている。一方2014年、2015年両方とも後期は、ごく少ない人数に収まっている。確かに受講者数が限られているため、授業は進めやすくなるが、シラバスは前期の授業と同じものであるから、後期のみ全く別のことをするというわけにはいかない。臨機応変に対応する必要があったのだろうが、内容的に変更はしたものの、同じような方法の授業になってしまったのは反省すべき点である。

また、本講義では、映画を見せ、それに関連する歴史的事実や文化的現象を紹介するという形を取っていたが、本当に映画を見せることが講義として適切なのか、という疑問も抱いている。映画というやや分かりやすいジャンルの芸術作品ではなく、文学作品や絵画や音楽を使っても、同じように背景となる知識を解説し、学生自身に考えさせるという授業は可能なはずである。どうしても学生が受け身になってしまいがちな映画の聴取よりも、文学作品を読解するというような能動的な参加が含まれるプログラムの方が、授業として適切ではないだろうか。

さらにテーマに関しても、近現代ドイツの歴史を取り上げるのであれば、現代において大きな問題となっているような、移民や亡命者の問題、多言語・多文化社会の問題、ナチスドイツ表象とそのパロディといった、より幅広い問題も取り上げることができると考えられる。

2016年度は、ここまでの反省点を受けて、従来の方法を大きく変更し、文学作品を中心に取り上げ、文学に反映された歴史的な出来事を解説するという講義を行っている。まだ4週目が過ぎたところであるが、現時点ではこれまでよりも相互的な授業ができており、学生も能動的に参加できているなど、概ねうまくいっている印象を受けている。現在取り組んでいる方法についても、アンケートなどでデータを集めたのちに、改めて報告することにしたい。

注

1. 2014年度前期の受講者は経営学部経営学科と会計学科の1年生、後期は商学科の2年生のみとなっていた。また、2015年度前期は経営学科および会計学科の1年生、後期は経営学科と会計学科の2年生が受講していた。
2. 代表的な業績として、著書『言語と狂気——シュレーバーと世紀転換期ドイツ』、水声社、2014年を挙げることができる。
3. 2015年後期の授業では、前期7回および8回で扱った『ベルリン天使の詩』に代えて14回、15回に『おじいちゃんの里帰り』を取り上げた。本作はトルコ系移民家族

の物語であり、14回にはなぜトルコ人労働者がドイツにやってきたのか、15回には移民がもたらした文化と現代の移民や難民の問題を解説した。

4. 各回の問題は、映画のポイントとなるような内容（主人公や登場人物の行動とその結果どのようなことが生じたか）について3～4の設問を用意し、配布資料に印刷した。例えば、『善き人のためのソナタ』を扱った2015年後期第8回は、「1. ドライマンは盗聴されているかどうか確かめるためにどうしたのか？、2. その結果どのようなことが起こったか？、3. 禁止薬物の使用が見つかりシュタージの取り調べを受けたジーラントはどうしたか？、4. ここまでの内容について考えたことを書きましよう」という問題を出している。
5. 期末レポートを課したのは、前期のみ。後期は2014年度と同様に、授業内容について選択式、記述式のテストを行った。
6. アンケートは前期のものである。後期は注3に述べたように、取り上げた作品が異なる。また、注5に述べたように、期末レポートを課さず、筆記試験を行ったので質問5は削除した。
7. 2015年度後期は登録者が8名、毎回授業に出ている学生が6名、アンケート回答者は5名だったため、同数になる項目が多かった。